様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１２６０８

研究課題名（和文）手芸品の社会的価値に関するジェンダー構造

研究課題名（英文）Gendered constructions of the social value of handicrafts

研究代表者
山崎　明子（Yamasaki, Akiko）

奈良女子大学・生活環境科学系・教授

研究者番号：３０５７１０７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本課題は、手作り品の生産と消費のプロセスを歴史的検証を目的とし、ジェンダー的視点から手仕事をめぐる問題を、言説に着目して以下の点を明らかにした。
第一に、手芸的営為には常に稼ぐ／稼がないという選択肢が用意され、前者は家庭的趣味として奨励され、後者は生活手段として奨励されており、これらは女性の市場経済への動員と結びつきコントロールされてきたこと。第二に、趣味の手芸により社会参画することが求められ、女性たちを無償で社会参画させる言説のコントロールが行われてきたこと。第三に、現代の手作りブームは過去の手仕事の価値づけと大きな変化はなく、手仕事の価値を曖昧化しながら消費イデオロギーに女性を回収すること。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、ジェンダー化されたものづくりの現場や流通、生産／消費、それをとりまく言説の歴史を追い、近代から現代まで続くものづくりの根底にあるジェンダー構造の一端を明らかにしている。その構造は、様々な手作りの現場の格差を生み、また稼げないものを女性化し、女性化された領域に女性等を参入させる力を孕んでいる。この構造に言及することにより、ものづくりの現場に遍在し、組織される言説のあり方を問い、公正な語りや展望を示唆することができ、今後の様々な生産の現場のジェンダー平等に寄与することができる。

研究成果の概要（英文）：This project aims to provide a historical examination of the processes of production and consumption of handicrafts and to identify the following issues surrounding handicrafts from a gender perspective, with a focus on discourses.
Firstly, that craft activities have always offered the option of earning/not earning, the former being encouraged as a domestic hobby and the latter as a means of livelihood, linked to and controlled by the mobilization of women into the market economy. Second, the demand for social participation through handicrafts as a hobby has been controlled by a discourse of free social participation for women. Thirdly, the current boom in handicrafts has not changed much from the valorization of handicrafts in the past, and reclaims women in an ideology of consumption, while blurring the value of handicrafts.

研究分野：ジェンダー論

キーワード：ジェンダー　手芸　手作り品

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年、世界規模で手作り品の価値の変動が起こっている。その一端には、オンラインによる手作り品販売サイトの拡充・拡大という現象があり、制作者自らがその市場に参入する／させられることでモノの価値付けを引き受けていくことになり、またそれは極めてジェンダー的問題である。こうした手作り品の価値を、市場価値だけでなく社会的・文化的価値と併せて検討することは、喫緊の課題であり、その歴史的変化を追い、手作り品の価値とジェンダーの関係を問うことが必要と考える。

２．研究の目的

手作り品の社会的な価値は、どのように変化してきたのであろうか。本研究課題は、手作りに高い価値が置かれ日常的に手仕事が不可欠だった時代から、それが必須ではなくなった時代、そして他者の手仕事を購入する社会への変化を追い、その背景にある社会のジェンダー構造とモノの価値の変化を検証するものである。手作り品はいかにして価値づけられ、いかに流通するのか、そしてそれを支える表象と言説を明らかにする。

３．研究の方法

近代から現代までの史資料調査を行い、手作り品の言説・表象を分析するとともに、その中の特徴的な変化を確認する。また、同時代における産業、労働、教育等の状況を把握する。さらに近年のジェンダー的問題を反映した現代のテキスタイルアートの作品調査を行い、広くものづくり、手仕事、表現とジェンダーの関係を考察する。

４．研究成果

(1) 日本近代女子教育における手芸の位置づけについて、特に女子教育家下田歌子の手芸と労働に関する議論を再考した。下田の女子教育思想については、すでに拙著にて論じてきたが、それを発展させ、女子の自立を目指した議論を中心に、手仕事・手芸のあり方を明らかにすることができた[1]。

手芸教育は 1900 年前後から広く女子教育の中に定着するが、手芸技能の習得には女性の教養を高めることと、経済的自立の手段となることの二つの方向性がある。下田の手芸へのまなざしは、その両方を取り入れたものであった。女性が自立することへの高い関心は、手仕事以外の多様な科目の設置からも読み取ることができる。

(2) 伝統的かつ民族的な手芸が世界各地で衰退していく中で、その技術や意匠を伝える方法が模索されている。手作り、手仕事に注目する本課題では、アイヌの人々の刺繍文化の伝承と和人による模倣表現を検討した。また、アイヌ文化展示における展示のポリティクスを明らかにした[2]。

和人のアイヌ刺繍への関心は戦前から高く、特に手芸教育者や手芸家の女性たちは、刺繍のヴァリエーションの一つとしてアイヌ刺繍を取り入れた事例もある。戦後活躍したファッションデザイナーの中にはアイヌ刺繍を真似てドレスを縫った事例、また著名なアイヌ文化研究者との接触を経てアイヌ刺繍の本を出版した女性もいる。アイヌの人々が北海道の機動訓練で学ぶルートとは別に、民族的な手仕事への関心から独自に文様を真似ていったと捉えることができる。作る主体が誰であるのかということは、アイヌ刺繍の普及と継承を考えるうえで重要な論点となる。

(3) 手芸文化において一定の位置に置かれてきた人形やぬいぐるみは、現在は既製品が主流となっている。人形、ぬいぐるみはいずれも子供と女性の文化と認識されてきた歴史をもつ。使用者・消費者だけでなく、これらの文化はその作り手としてほぼ女性が想定されているとともに、女性から子供への贈り物と位置づけられてきた。昭和初期から高度経済成長期まで高価な既製品は存在していたものの、主流は手作りのぬいぐるみで、家庭で作られてきた。1980 年代頃からぬいぐるみは既製品が主流となり、一方では安価な量産品が増加し、他方では高級化・ブランド化され、大人の男性たちが消費者として台頭したことが各種メディアで示されていく。ぬいぐるみの生産と消費は、極めてジェンダー化されているものの、現代では変化をきざしが見られるようになったことを明らかにした[3]。

(4) 本課題においては、手芸や手仕事、手作り品などの概念を考える上で、他の研究領域の研究者との意見交換や議論が不可欠であった。本課題と並行して開催されてきた国立民族学博物館の研究プロジェクトでは、民俗学、人類学、芸術学等の研究者と議論するなかで、手作り品の社会的価値や手作りのコミュニティ、手作りの現場などについて多くの知見を得ることができ

た。また、手芸とは何か、社会にいかに存在し得るのか、多角的な議論をすることができた。この成果は一冊の書籍として刊行することができた[4]。

この成果は、共同研究における議論を経たうえで、本課題に取り組むなかで、課題の核となる手作り品の社会的価値を見定めることを可能にする極めて重要なものであった。

（5）本課題期間は、コロナ禍の影響が大きかったが、この社会の変化は手作り品をめぐる状況にも大きな変化が見られた。外出機会が減ったことにより既製服の消費の落ち込みが繰り返し報道され、またマスク着用が必須となりながら圧倒的にマスクが足りないことが社会問題化した。この変化の中で、多くの人が手作りマスクの制作を始め、店頭にも手作りの布マスクが並び、手作りマスクを寄付した人々への感謝が報道され、長く裁縫をしていなかった高齢女性たちがミシンを再開することとなった。

この問題が手作り品とジェンダー規範の問題であると捉えられたのは、女性社員だけがマスクを縫うことを求められた企業や、マスクを寄付したのも女子学生だったことなど、手作りマスクの作り手のほとんどが女性であり、社会の危機に際し経済的見返りの少ない労働で貢献した点である。こうした点を海外のマスクへの関心と日本の手作りマスクの差異を分析した[5]。

（6）手芸をめぐるジェンダー構造は、その担い手の多くが女性であり、その技能により稼ぐことが前提にないことで、主体の格差と経済的格差が固定・連動していることが問題となる。圧倒的に女性を主体とすることが歴史的・現在的にも明らかな文化であるため、男性が手芸をすること自体極めて稀であり、男性の手芸は男性であるということのみでメディアで大きく取り上げられ注目される傾向にある。

こうした男性の手芸文化を再考するジョセフ・マクブリンの著書について、書評という形ではあるが紹介することができた。規範的実践（としての手芸）をクイアする――規範的実践を崩す――ことにより、手芸をする男性たちが単に逸脱とみなされるのではなく、実践の主体として位置づけていくための研究だと言える[6]。

（7）本課題においては、手芸をめぐるジェンダー秩序とならんで、手芸とアートの関係性とそのジェンダー格差について検証することも重視してきた。現代美術のなかでも特にテキスタイル・アートの表現方法や素材への関心、その主体のアーティストとの意見交換により、糸や布の表現の現在性が手作り文化をいかに交差するのかを考察してきた。

テキスタイル・アーティストへのインタビューを続けてきたが。本課題中ではミシンを搭載した車で移動し、その土地で葉っぱを縫い、人と関わりながら制作をするアーティストの活動を見せていただいた。そのサイトスペシフィックな制作と縫う行為により結晶化する作品であった[7]。これらの持続的な制作の現場の調査研究については、今後、展示などにより明確な成果を公表していく予定である。

手作り品や手芸文化の制作・展示に関する調査の中でも異色のものとして、都内ギャラリーで実施された「Museum of Mom's Art ニッポン国おかんアート村」展について、ウェブメディアにレビューを執筆した[8]。批評活動は、現在進行形の手芸・手作り文化の表象を読み解くために不可欠であるとともに、その方向性を見極める重要な研究手段となる。簡易な手芸技法に限定した高齢女性たちの手芸品を集めた本展は、本来の手芸品が生かされた場から逸脱させ、その拙さや素朴さを好ましいものと語りながら、制作主体を女性に限定していく可能性を内包している。こうした点をまとめ、公表するものであった。

（8）最後に、本課題とこれまで手作り品や手芸文化に関する拙稿をまとめ、特に手仕事の社会的価値とそれをめぐるジェンダー構造について単著にまとめることができた。女子教育における手芸、内職文化、高度経済成長期の手芸ブーム、戦時下の手芸、女性の職人等を論じ、公表した[9]。

---

[1] 山崎明子「下田歌子の手芸論―「手芸」による女子の自立を目指して」広井多鶴子編『下田歌子と近代日本　良妻賢母論と女子教育の創出』勁草書房、2021 年、pp.225-249.

[2] 本成果は、池田忍編『問いかけるアイヌ・アート』岩波書店、2020 年において、第 7 章「アイヌ文様に触発されて」（pp.167-178）、第 9 章「アイヌ文化をめぐる表象の現在―「誰」が「何」を作るのか」（pp.215-239）の 2 編が所収されている。

[3] 「ぬいぐるみとジェンダー」『ユリイカ』53 号、pp.255-262.

[4] 上羽陽子・山崎明子編著『現代手芸考：ものづくりの意味を問い直す』フィルムアート社、2020 年

[5] 水島希・山崎明子「手作りマスクが再編するジェンダー秩序――手仕事と科学の狭間で」『f vision』1（1）2020 年 6 月、pp.23-29.
[6] 山崎明子「書評 Queering The Subversive Stitch: Men and the Culture of Needlework」『アジア・ジェンダー文化学研究』6 号、2022 年 3 月、pp.75-78.
[7] 山崎明子「徳本萌子：ミシンで葉っぱを縫う―現代日本のテキスタイル・アート⑪」『美術運動史研究会ニュース』175 号、2019 年 4 月、pp.1-7.
[8] 山崎明子「「おかんアート」が不可視化しているものとは何か。「Museum of Mom's Art ニッポン国おかんアート村」レビュー」TOKYO ART BEAT, 2022 年 3 月 7 日、https://www.tokyoartbeat.com/articles/-/okan-art-2022-03-07
[9] 山崎明子『「ものづくり」のジェンダー格差：フェミナイズされた手仕事の言説をめぐって』人文書院、2023 年

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山崎明子	４．巻 53
２．論文標題 ぬいぐるみとジェンダー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ユリイカ	６．最初と最後の頁 255.262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山崎明子	４．巻 172号
２．論文標題 山﨑香織：ロウケツ染の「快楽」と「実験」―現代日本におけるテキスタイル・アート⑩	５．発行年 2019年
３．雑誌名 美術運動史研究会ニュース	６．最初と最後の頁 8-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山崎明子	４．巻 175号
２．論文標題 徳本萌子：ミシンで葉っぱを縫う―現代日本におけるテキスタイル・アート⑪	５．発行年 2019年
３．雑誌名 美術運動史研究会ニュース	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計5件

１．著者名 山崎 明子	４．発行年 2023年
２．出版社 人文書院	５．総ページ数 286
３．書名 「ものづくり」のジェンダー格差	

1．著者名 広井　多鶴子	4．発行年 2021年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 360
3．書名 下田歌子と近代日本	

1．著者名 上羽陽子、山崎明子	4．発行年 2020年
2．出版社 フィルムアート社	5．総ページ数 295
3．書名 現代手芸考	

1．著者名 池田 忍	4．発行年 2020年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 298
3．書名 問いかけるアイヌ・アート	

1．著者名 神野 由紀、辻 泉、飯田 豊	4．発行年 2019年
2．出版社 青弓社	5．総ページ数 372
3．書名 趣味とジェンダー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関